

授業においてなぜウグラウンドストロークが 出来ない者がいるのかを考える

鷺川 是¹⁾

A Study on the Reasons Why Students Cannot Control Groundstrokes in the Lesson

Tadashi Ugawa¹⁾

Key words : timing in swinging forward

reverse of a sequence of the instructing method in groundstrokes

キーワード：ラケットの振り出しのタイミング
グラウンドストローク習得段階の順序性を逆転

I はじめに

大学一般体育の授業でテニス（主にグラウンドストローク）の指導を一学期間受けても、グラウンドストロークが出来ない学習者が少数ながらいる。もちろん、筆者の指導にも問題があるだろうが、筆者のテニスの指導に関する考えと、学習者が授業に求めることとの間に「隔たり」がありすぎるのが、グラウンドストロークが出来ない学習者がいることの主要因と考えている。その隔たりがあることには、人間の視覚重視、観念重視傾向があることや、それまで（小学校、中学校、高校）のスポーツ教育のあり方の影響を学習者が受けていることが関与していると考えられる。そこに直接的ではないが大学一般体育でのスポーツの履修制度、指導体制のあり方も関与しているだろう。本来、スポーツはしてもしなくてもいい自由があるから、大学でスポーツ履修の制度が必修でいいのかどうかという問題もある。現在、大学教育改革でその制度も変わりつつあるが、まだ必修制度があるものとしてグラウンドストロークが出来るようになれない学習者がいることの問題を考えていく。グラウンドストロークが出来そうにない学習者、出来そうな学習者、もうすでに出来るようになっている学習者（以下にそれぞれをA, B, Cと記す。A, Bがいわゆる初心者で、

Cが経験者である）のスポーツ観、授業観、グラウンドストロークに対する身体的能力、イメージを、また授業におけるA, B, Cの関わり方などを見て、筆者の考えと学習者が望むこととの隔たりがどんなものなのかを考察していく。そして隔たりにはどんな意味があるのか、それはどうして生まれるのかなどを考察して、特にテニスが出来そうにない学習者への指導、彼らの学習への一助としたい。

指導現場では、技の仕方や指導の仕方の客観的なことを参考に指導するにしても、教師と学習者の主観に重要な役目がある。¹⁾ いろんなことを数量化して客観的に示すことも大切だろうが、敢えて筆者が主観的に感じていることを述べる。筆者のそれと、テニスを指導している教師が、また学んでいる学習者が主観的に感じていることを比べ合わせて貰う方が、より指導、学習に生かされると考えるからである。

II テニスを指導する時に筆者が学習者に望むこと

1 テニスを習得するとは

テニスを習得するということは、普通ゲームが出来るということであろう。ゲームが出来るには最低限、下からのサービス、グラウンドストローク、「ゲームの動き」（ポジションどり、ダブルスゲームならパートナーとの連携、連絡など）が出来ることがある。ダブルスゲームへの導入段階なら、四人とも後衛でグラ

1) 愛媛大学教育学部
〒790 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790,
Japan

ウンドストロークが出来ればいいのであるが、ペアの一人が後衛、もう一人が前衛のダブルスゲームの場合は、前衛はネット際で、来ている打球にノーバウンドでラケット面を打球方向、角度に向けて当てるだけのボレーでいいから出来る必要もあるだろう。この初歩的なボレーはバックスイングをほとんどしないで、打球方向、角度にラケット面を向けてボールに当てればスイングが終わるもので、グラウンドストロークの一部分と考え、グラウンドストロークへの導入としてもやらせている。もちろん、ワンバウンドとノーバウンドの違いがあるのだが、よい打点で打球方向、角度にラケット面を向けて当てる感覚を、この初歩的なボレー練習で掴ませている。下からのサービスはグラウンドストロークでのラリーを始める時の球出しでもあり、グラウンドストロークと同じようにラケットを動かす動きである。ゲームの動きを習得するには、グラウンドストロークでのラリーがある程度は自由に出来る必要がある。また、グラウンドストロークの、あるいは球出しの打ち上げる角度を高くしたのがロビング、ロビングの球出しであり、その打球をコントロール出来ない相手スマッシュ練習が出来ないことになろう。相手がボレー練習をする時も、こちらのグラウンドストロークの打球がコントロールされる必要があるだろう。だからテニスを習得させるということは、グラウンドストロークでのラリーを出来るようにさせることと考えている。

2 グラウンドストロークが出来るとは

前述したようにクラスの中にはA、B、Cがいる。Aは一般的に、グラウンドストロークに対する「レディネスが不足」（スピード感覚が少ない、緩い打球が来てもラケット面の真ん中にボールを当てられない、よい打点を予測出来ないなど）の状態があったり、スイングをする時に力を入れ過ぎたり、勢いを使い過ぎたりする「癖の動き」を持っていたり、自分が今どんな動きでボールを打ったかを「自己観察できない」状態などがある。例えばラケットを振り出す前に反動をつけていること（いわゆる「二度引き」）が自分では分からないことが、自己観察が出来ないという一例である。出来そうにない者と表現しているが、その者の能力状態に適した段階を追って練習していけば、テニス（グラウンドストローク）は誰でも出来るようになれると筆者は考えている。

グラウンドストロークが出来るとはゲームの中でラリーが出来ることと捉えたいが、ゲームになるとどうしても勝ちたいということになり、能力差があればラリーが出来ないことになりやすい。クラスの中にはA

もいることから「その者なりに打球を安定してコントロール出来ること」と筆者は捉える。その者なりにとは、相手からの打球がその者が今持ち合わせている能力内で対処できる打球なら、ある程度は安定してコントロールして打ち返せる、つまりラリーが出来るということである。極論すれば、一般的にショートラリーと言われていたよりもっとショートに、ネットの向こう1～2mに打球を落としバドミントンのヘアピンのようなラリーでも出来るなら、筆者はグラウンドストロークが出来ると考えるということである。また、打球をコントロールする内容には、相手コート内に打球を入れることを必須事項として、打球のコース、長短、高低、緩急、打球に回転を与えるかけ具合などが、場面に依じて複合されたものと考えられる。場面には、グラウンドストロークでラリーを、相手はボレーでラリーをしている場面、それも習い始めや、少し出来るようになってから何かを課題にしての練習場面、あるいは試合場面などがある。またいずれの場面も、相手からの打球の状態、相手の能力状態、相手のコート内外での位置などによる違いがある。いろんな場面と、コントロールする内容を考え合わせるとグラウンドストロークが出来ることには、その者なりに打球をコントロール出来る内容と、そのでき具合に幅広い段階、つまり発展性があると考えられるだろう。

3 みんながグラウンドストロークが出来るには

筆者はクラスの中のより多くの者が、つまりAもグラウンドストロークでのラリーが出来るようにと望んでいる。そのためには、習い始めにはAの能力状態に適する指導をB、Cに対してもして、誰もが相手のAが打てそうな緩い、短い、コースがほぼ一定の打球（以下には「相手のAが打てそうな打球」と記す）をコントロールして、ある程度は安定して打てる必要があると考えている。なぜなら、授業内ではAとB、AとCの組み合わせでも、もちろんA同志の組み合わせでも練習する場面がある。Aは速い打球、長い（深い）打球、コースが不安定な打球のうちのどの打球が来ても普通、よい打点が取れないこと、ラケットの振り出しのタイミングが合わないこと、相手からの速い、長い打球を打ち返すには力が要するという感じでラケットを勢いよく振ることなどから、相手（Aはもちろん、B、Cでも）が打てそうな打球を全くと言っていいほどコントロールして打てないからである。すると相手からは、自分（A）が打てそうな打球は返って来ないだろう。更にボールをよく弾くラケットと、よく弾むボールという道具の特徴がある。A、B、Cの

誰もが、ある程度は安定して「相手のAが打てそうな打球」を打てないと、Aは自分の能力状態に適するグラウンドストロークの仕方のコツを掴めないし、レディネス不足の充足も、欠点の修正も、癖の動きの修正もできないことになる。

そしてB、Cが「相手のAが打てそうな打球」を打つ練習をすることは、彼らがAの状態（Aがグラウンドストロークが出来ない気持ちや感じなど）を多少とも理解、実感し、Aと「共存」できる能力（「相手のAが打てそうな打球」を打てる能力）を身につけて欲しいからである。極論すればB、Cは、グラウンドストロークなら自得できる能力を持つ者たちで、どんな指導（例えばここに挙げているAの能力状態に適する指導）を受けても、グラウンドストロークが出来るようになる能力を持つ者たちであろう。この指導はAたちと共存できる能力をB、Cにつける指導でもあるが、B、Cが後々、速い打球をコースなどもコントロール出来て、その安定性や正確性を備えた幅広い実技能力を持つことにも繋がってくる」と筆者は考えている。それはともかく、B、CがAと共存できる打ち方をしてくれないと、Aはグラウンドストロークがほとんど出来るようにはなれないと見ている。

4 「相手のAが打てそうな打球」をコントロールするには

a ラケットの振り出しのタイミングをあわすことの大切さ

「相手のAが打てそうな打球」を打てるには、よい打点を取れること、スイングのスピードをゆっくりすること、インパクトあたりでの力の入れ方、入れ加減をうまくすることはもちろんのことであるが、特に緩い、短い打球を打てるラケットの振り出しのタイミングを身につける必要がある。筆者はこのタイミングを伝えることが、グラウンドストロークを指導する時の一番重要なポイントと考えている。このタイミングとは、よい打点でボールをヒット出来る所へ身体を運んでおき、なおラケットを準備しておき、自分の方に進んで来ている打球にあわせて、よい打点でヒット出来るようにラケットを振り出すことである。緩い、短い打球を打てるようにラケットの振り出しのタイミングがあう（ゆっくり振り出せる）と、よい打点で打球方向、角度にラケット面を向けてボールに当てやすくなり、それまでのスイングの長さで作られた運動エネルギーを打球に伝えられ、打球のコースも高さもコントロールしやすいようである。一般的にはラケットの振り出しのタイミングが遅い（一気に振り出す）者が多く、インパクトでラケット面を打球方向、角度に向

けてボールに当てられなくなり（よく言われるラケット面を振り回すこと）、せっかく作った運動エネルギーをボールに伝えられなくなり、打球をコントロール出来なくなるようである。例えば、グラウンドストロークが出来る者でもハードコートで雨が降り始めた時や、相手の打球がイレギュラーバウンドした時は、たいてい振り出しのタイミングが遅れて、ラケットを一気に振り出す感じになり、打球は飛び過ぎたり、コースが狂ったりすることが多いようである。ラケットを振り出す前の「二度引き」も同じ理由からよくないと言われるのだろう。相手の能力状態によっては、もっと緩い、短い打球を打ってあげないといけない時も、つまり、もっとゆっくりラケットを振り出すことが必要な時もある。

b 習い始めにはラケットを振り抜かせない指導をする

「相手のAが打てそうな打球」を学習者みんなに打たせるには、もう一つ習い始めにはラケットを振り抜かせない指導が大切と考えている。このことにはもちろん、緩い、短い打球を打てるようなラケットの振り出しのタイミングを掴ませることが関係している。ラケットを一気に振り出すと、どうしても振り抜いてしまい前述したようにインパクトでラケット面を振り回してしまうことになりやすい。すると打球をコントロール出来ないし、ラケット面にボールがきれいに当たれば、速すぎたり、飛びすぎたりする打球になるだろう。習い始めに、たとえラケットをゆっくり振り出しても振り抜いてしまうと、AもBも、特にAはほとんど打球をコントロール出来ないようである。Cの中にもラケットを振り抜くと、打球のコースをコントロール出来たとしても、緩く、短く打つことは出来ない者がいる。つまり、そのCはAと共存できる幅広い実技能力を持っていないということであろう。Cの中のほんの一部の者がラケットを振り抜いたとしても「相手のAが打てそうな打球」をコントロール出来るようである。一般的には授業の中にそんなCは少ないようである。後々、ゲームをするようになって相手からの打球が速くなってくると、ラケット面でボールを「押し」（ラケット面からの「球離れがよすぎない」と表現している）ながらラケットを振り抜かないと、打球は飛び過ぎることが多いことを説明、示範しておき、習い始めにはラケットを振り抜かせない指導をみんなにする。

最初は、緩く投げられたボールを、あるいは緩く球出しされた打球を、ラケットをゆっくり振り出すタイミングを掴むことを練習しながら、よい打点でラケット面を打球方向、角度に向けてボールに当て、面をそのままの向きで10～15cmぐらい動かした

ら振り終るぐらいで一本打ちを練習させている。²⁾ラケットを振り抜かない練習を長期間すると、後々ラケットを振り抜けなくなる者が時々いるから注意している。この10～15cmのラケット面の動きが前述のボールを「押し」ことにも、打球のコースを、高さを安定させることにも繋がるようである。先にグラウンドストロークの指導でラケットの振り出しのタイミングが重要であることを述べたが、このラケット面でのボールの「押し」も重要なことで、打球にスピンをかける時にも関係してくると考える。ラケットの振り出しが一気にになると、大抵ラケット面からの球離れがよくなり、つまり「押し」がなくなり、打球が飛び過ぎるという関係があるようである。

c ショートラリーの練習

一本打ちの練習で「相手のAが打てそうな打球」を打てるようになると、ショートラリーをさせる。一本打ちをするよりも、ラリーの方が打ち方のコツを掴む練習を、レディネス不足の充足をする機会が多くなるし、興味が増えるからである。ショートラリーが出来ることは、ラケットの振り出しをゆっくり出来ることであり、打球をコントロール出来ることでもある。ショートラリーが出来るようになれば、それまでのスイングの過程をとって、ほんの少し余計に力を入れ、ラケットを振り抜けば長い打球を打つことは、道具の特徴からもAにもすぐ出来るようである。Bはショートラリーが出来ると緩い打球でならロングラリーもすぐ出来るようである。普通、週1回の授業で2週目からは、Aが関与しない組み合わせではロングラリーをさせている。しかしAの中には、長い打球が来るとよい打点が取れない者も出てくるし、長い打球は短い打球に比べて速いから、ラケットの振り出しのタイミングが合わない者も出てくるようである。筆者としてはショートラリーをしているうちに、自然にロングラリーになって来ることを待つ考えである。極論すれば、ロングラリーになるまではゲームをさせないでも待つ考えである。その時、筆者が学習者に注意することは、相手に打ち返すとその場所より少しはベースラインより下がって相手の打球を待てということである。相手もそんなに短くは打ってくれないし、短くても打球は自分の方に向かって来るからである。ロングラリーになって、またグラウンドストロークが出来なくなるとショートラリーに戻るように指導している。Aがロングラリーが出来るようになって、打球のコース、高さ、長さなどを変化させてコントロール出来るには、またその安定性を得るには時間がかかるようである。指示を出さないとA同志

で練習する傾向がある。A同志の組み合わせを少なくするためにもローテーションをさせている。B、Cが関与する組み合わせの時には、お互いが出来るなら速い打球をコースも長短もコントロールして、安定して打てるようにと練習させている。

5 ラリー練習とゲームを繋ぐ

グラウンドストロークでその者なりに打球を安定してコントロール出来るようにと学習者に望むことは、グラウンドストロークを習得する時に、ボレーやスマッシュ（スマッシュは時間不足で授業では指導していない）を習得する時に、またゲームの動きを習得する時に、特にAとB、Cとの共存を、最終的にはゲームでの「過程のよさ」（味方との連携、連絡、相手との攻防などがうまく出来ること）のその者なりの発展を望んでいるからは言うまでもないだろう。ラリー練習で打球をある程度安定してコントロール出来るようになると、筆者はゲーム形式の中でラリー練習をする課題を与える。一人が前衛、もう一人が後衛の形のダブルゲームで、ポジションどりやパートナーとの連携、連絡が出来るようになる練習も含めて、後衛同志のラリー練習をする。下からのサービスから1回と数えて4回まではサーバーとレシーバーを結ぶ方向でラリーを続け、その後は何処へ打ってもいいが、出来るだけ相手の前衛に取られないように、また簡単にミスをしてラリーを途絶えさせないようにという課題でラリー練習をさせる。5回目の打球を相手の前衛をロビングで越すことまで規定してラリー練習をさせることもいいだろう。また、グラウンドストロークに対して幅広い実技能力を持つ者同志のペア（台と呼んでいる）と、まだ安定してはグラウンドストロークが出来ない者同志のペアとがゲーム練習をしたり、ゲームをしたりする。台は出来ない者をリードすること、出来ない者は簡単にミスをしたくないことを課題にしてである。特にAがテニスを習得するためには、ゲーム練習、台とのゲーム練習をするなどの時間を長く取る必要があると考えている。もちろん、ラリー練習の時にも、B、CにAとの共存を頼むばかりでなく、B、Cの組み合わせの練習も考慮したように、ゲーム練習、ゲームにおいても教師はペアの組み合わせや、対戦ペアを考慮する必要もあるだろう。

Ⅲ 学習者のグラウンドストロークの習い方

1 Aのグラウンドストロークの習い方の一般的傾向

a 習い始めから速い打球を求める傾向

習い始めに誰もが「相手のAが打てそうな打球」

を打てるようにと指導することを、Aの中にも訝る者がいるし、B、Cは嫌がる傾向があると筆者は見ている。前述したショートラリーの練習をやり始めた時は、二人の能力状態にもよるが、打球をネット上2mぐらいを通してネットとサービスラインの中間ややサービスラインより、お互いが落とすぐらいでやらせる。それまでに緩く、短く球出しされた打球を「相手のAが打てそうな打球」を打つ一本打ちの練習をしても、いざネット越しにショートラリーをすると、Aはよい打点が取れてもラケットを一気に振り出したり、インパクトで一気に入力を入れて、緩い、短い打球のコースを安定して打てない者が多いようである。Aにとってはそんなに短く打つことも難しいのかも知れない。そこで少し長く打たせると、相手からの打球も短い打球の時よりは速くなり、Aは今度はよい打点が取れなくなったり、取れても打球を長く飛ばそうとしてか、なお一層、一気にラケットを振り出したり、力を入れ過ぎてインパクトでラケット面を振り回したり、さらにはラケットを振り抜いてしまう傾向がある。なお速い、何処へ飛ばかわからない打球が相手にいくようである。相手がB、Cで共存能力や共存する気持ちを持っていても、そんな打ち方の打球が来ると彼らも「相手のAが打てそうな打球」をコントロールしては打ち返せないようである。A同志の組み合わせでもお互いがそんな打ち方を、またAが壁打ちでグラウンドストロークの練習をする時でも、壁に向かってそんな打ち方をする者が多いようである。そこにはグラウンドストロークは「こうするもの」（例えばラケットは振り抜いてしまうもの、ある程度は速い打球を打つもの）というイメージがAに最初からあるからと考えられる。もちろん、Aが「相手のAが打てそうな打球」をコントロールして打てないことには、Aのレディネス不足などの状態が関係するだろう。そんな状態があるからこそ、筆者はAにも「相手のAが打てそうな打球」をコントロールして打てるようにと指導するのである。しかし、Aの中には先のグラウンドストロークのイメージに縛られ、自分の能力以上のことを習い始めから求めようとする者が多いようである。だから、自分が今どのようにラケットを動かしてボールを打っているのかを自己観察する余裕もなくなり、グラウンドストロークをなかなか習得出来ないのだろう。

b 授業態度と授業後

本人は筆者が出す課題をやっている積もりなのかも知れないが、その課題をほとんど実践してくれないで、グラウンドストロークがなかなかうまく出来

るようになれないから、自分はテニスに不向きだというAもいる。授業時間外に1対1で指導しても指導し切れないようなAも時々いる。もちろん筆者の指導にも問題があるのだろう。しかし、そんなAは相当なレディネス不足の上に、力の入れ方などに癖の動きを持ち、先のグラウンドストロークのイメージを特に強く持っているようである。中には学期の初めからではないにしても、自分にはテニスが出来ると言われるわけがないと虚無的な授業態度の者も、また自分なりにうまく出来ることなんてどうでもいい、その場が楽しければそれでいいというような利己的な授業態度の者もいる。つまり、グラウンドストロークの習得やその発展を望んでいないような者で、彼らは打球をコントロール出来なくても、とにかく打球が飛んでいくからいいぐらいに思っているようである。虚無的、利己的な授業態度の者がいることには、それまでのスポーツ教育のあり方のその学習者への影響、大学でスポーツを履修しなければならぬ必修制度、筆者の指導の仕方などが複合的に関わるのだろう。

緩い打球でなら、コースをコントロールしてロングラリーがある程度安定して出来るようになったAの中に、学期が終わり、速い打球は打つが打球の長短、コースをあまりコントロール出来ない友達とラリーを、あるいはゲームをして、せっかく身につけたラケットの振り出しのタイミング、力の入れ方、ラケット面の使い方などを狂わせてしまう者や、自分には速い打球が打てないからとテニスをやめてしまう者もいるようである。この傾向は筆者の授業の中でも、ゲームをし始めるとある。つまり、Aが打球のスピードに徐々に慣れていくことをB、Cが待ってあげない、A自身がそれを待てない傾向である。ここにも前述したグラウンドストロークのイメージの影響があるものと考えている。

2 B、Cのグラウンドストロークの習い方の一般的傾向

a 速い打球を打つがコントロールが不安定

グラウンドストロークに対するレディネスがあるBは、習い始めからラケットを振り抜いてしまい、長い、ある程度速い打球を打つ練習から始めても、一応グラウンドストロークが出来るようになるようである。しかし、週1回の授業で、その習い方では打球の速さはあるがコースのコントロールは不安定だし、打球がコートに入る確率は低いようである。また、前述した「相手のAが打てそうな打球」を打てないようである。その理由は、その習い方では前

述したグラウンドストロークを習得するのに重要なポイントであるラケットの振り出しのタイミングと、インパクトでボールをラケット面で押す動きをしっかりと身につけにくいからと考えられる。しかし、ずっとテニスが続けていけば、自分で打ち方を調整していったグラウンドストロークが安定して出来るようになる能力をBは持っているようである。Bはそんな能力を持っていることから「相手のAが打てそうな打球」を打つ練習を嫌がるのだろう。前述したAの一般的な習い方は、習い始めからここに挙げたBの習い方と同じように練習すれば、Aもグラウンドストロークが出来るようになるのと、つまりグラウンドストロークは「こころするもの」というイメージに縛られていたと考える。

Cに属する、高校のテニス部で少しテニスを経験してきた者や、テニスを自得してきた者の多くは、指導しない限り「相手のAが打てそうな打球」を打てない者が多いようである。例えば、テニスコートの空き時間に、彼が彼女にテニスを教えている光景を見かける。彼女の能力状態を筆者が判断する限り、もっと緩い打球を彼が出してあげないと、彼女はそれこそよい打点を取れない、ラケットの振り出しのタイミングなどを掴めない状況である。彼はそれだけの幅広い実技能力（共存能力）も、共存する考えも持ち合わせていないようである。あるいは、彼はグラウンドストロークをする時の、よい打点を取ることに、ラケットの振り出しのタイミングをあわすことなどの大切さを認識していないのかも知れない。もちろん、彼と彼女の立場が逆の場合もある。この幅広い実技能力や、共存する考えをB、Cに教える必要があり、その考えを理解してくれたら、彼らにはレディネスがあるから、すぐAと共存できる実技能力を身につけるようである。しかし、B、Cの中にもその考えを受けつけない者もいて、「相手のAが打てそうな打球」を打たない（打てない）者もいる。よくスポーツ教育の目標が人間形成にあり、スポーツをして社会性、協調性を養うなどと言われる。しかし、利害関係のある社会生活においての社会性、協調性を、利害関係のほとんど無い授業の中でのスポーツをしたぐらいで、それを養えると言えるのだろうか。スポーツ教育において、スポーツが出来る者と出来ない者が共存出来るような能力、考えを指導をした方が、この意味での人間形成に余程影響すると考える。それはともかく、筆者の考えるこの指導をするとどちらかといえば、B、Cの方がAと共存してくれる者が多く現れ、Aの方は前述したように自分の能力以上の打球を打とうとし

て、相手になったB、Cを困らせる者、つまり共存しない者が多いと筆者は感じている。

b 発展性のある攻防が少ないゲームの仕方

B、Cの中で、グラウンドストロークの練習の時にAと共存をしてくれない者は、ゲーム練習の時にも、前述したサーバーとレシーバーで4回ラリーを続けることをやっとした直後に、ラリー練習の時にも出来たことのないような打ち方をして打球をアウトさせ、ゲーム練習を壊す傾向が強い。Aの中にも時々そんな者がいる。ゲームになるとグラウンドストロークの四つの打ち方（自分の能力に応じて、相手からの打球を「逃げる」「繋ぐ」「崩す」「決める」と打ち分けること）をしなさいと指導するが、それをしないで極端に言えば、相手からどんな打球が来てもポイントを決めようと強打して打球を簡単にアウトさせ、ゲームを壊す者はもっと多いと筆者は感じている。一般的にはラケット面をかぶせながら、力まかせに打つ者が多い。相手からの打球が緩い場合はそれでも相手コートに打球が入るが、相手からの打球が速くなるとその打ち方ではミスが多くなるようである。また上からのサービスに関しても、サービスを練習し始めたばかりだし、ゲームの中でグラウンドストロークのラリーをもっとうまく出来るようになって欲しいからサービスエースを取らないように、ファーストサービスも、セカンドサービスも上からするとしてゲームをさせる。しかし、ファーストサービスはエースを取るように思いきり打ってフォールト、セカンドサービスは下からして、レシーバーがその打球を強打して打球をアウトさせるという場面をよく見かける。他のテニスの授業でもよく見かける。つまり、グラウンドストロークでは相手にボレーを、サービスでは相手にレシーブを練習させてあげられるコントロールや、その安定性を身につけようとするよりも、打球の速さだけを求めようとする傾向が、またゲームにおける「過程のよさ」を発展させていくことよりも、ただゲームに勝つことだけを求める傾向もあるように思える。それまでのスポーツ教育で技を、ゲームを発展させることを学んできていないのではないかと思われるほどである。

いわゆる競技スポーツでは、個々の選手の個々の技の仕方の安定性、正確性があるから、ゲームにおける「過程のよさ」があり、対戦している両者がもっと発展することに繋がるのだろう。競技スポーツにおける競争は一種の共存とも言えるだろう。そういう意味では、筆者の授業においても、それなりに攻防する過程があっってお互いをもっと発展する競

争を望むのだが、競争する形をとるだけで発展性のある攻防は少ないと感じている。

Ⅳ グラウンドストロークの指導—学習において筆者と学習者が望むことの隔たり

1 グラウンドストローク習得段階の順序性を逆転する傾向

筆者のグラウンドストロークの指導に関する考えと、学習者のその習い方を考察してきて、両者の隔たり（以下に隔たりとだけ記す）は以下のことにあると考える。筆者は学習者みんなが、その者なりにある程度は安定して打球をコントロール出来るグラウンドストロークの仕方を習得し、そのでき具合の発展を望んだ。そのために学習者みんなが共存することを望んだ。共存するにはクラスの中にAもいることから、特にAとの組み合わせの習い始めの練習場面では、お互いが緩い、短い打球をコースもある程度は安定してコントロールして打てるコツを身につける必要があると考えた。つまり、グラウンドストロークを習得するには打球をコントロール出来るコツを身につけてから、打球の速さを求めるという「習得段階の順序性」を踏むことを筆者は学習者に望んだ。もちろん、打球をコントロール出来るコツを身につけると、打球の速さを求めることを完全に分けて考えることは出来ないこと、つまり打球の速さの求め具合はその場面に依じての程度問題であることを認めてである。筆者は習得段階の順序性を踏まないで共存はしにくいと考えた訳である。ところが多くのAはグラウンドストロークの習い始めから速い、長い打球を打とうとする、あるいは打ってしまう傾向が強く、極端に言えば打球をほとんどコントロール出来ない状況がある。また、B、Cは打球を安定してコントロール出来る（「相手のAが打てそうな打球」を打てることも含む）ことよりも先に速い打球を打つことを求め、打球のコース、長短、高低などのコントロールや、その安定性は少ない傾向が強いようである。

以上のような傾向から、学習者の求めるグラウンドストローク習得段階の順序性が筆者とは逆の傾向があることに、またその傾向からそれを習得する時にA同志はもちろん、AとB、Cとの共存が少ないことに隔たりがあると考える。打球をコントロール出来るコツが身につけていないうちに、速い打球を打とうとする習得段階の順序性を逆転する傾向は、レディネス不足などの状態があるAには、その充足も、癖の動きや欠点の修正も出来ないことになり、なおそのコツを身につけられない「悪循環」が生じていると見る。

2 隔たりが生まれる要因

学習者みんながその者なりにグラウンドストロークを習得できるには、筆者の考える習得段階の順序性を踏む必要があることを説明し、指導すれば学習者は頭でも理解できる筈だし、道具の特徴もあることから身体でも実感できる筈だと筆者は考える。しかし、隔たりがあった。これはその順序性を踏む必要性を学習者は理解、実感できていないということ、あるいは頭では理解できるが、身体では実感できないということだろう。この隔たりが生まれる要因は、打球をコントロール出来るコツを身につけてから、打球の速さを求めるという筆者の考えと、再三挙げてきたグラウンドストロークは「こうするもの」というイメージに学習者が縛られている内容との対立にあると考えられる。

Ⅱ章ではグラウンドストロークが出来るとは、その者なりに打球を安定してコントロール出来ることで、そこに幅広い段階があると考察した。しかし、特にAのグラウンドストロークの習い方における習得段階の順序性を逆転する傾向、悪循環の傾向は、速い、長い打球が打てなければそれが出来るとは考えられないという思いが、またそれが出来るまでの過程が早くなければという思いがあり、彼らはグラウンドストロークが出来るということを幅狭く捉えていると考える。Aの能力状態から判断すると、特にAは「速い打球を早く打たなければ」というイメージを持っているようである。これがグラウンドストロークは「こうするもの」というイメージの内容と考えられる。B、Cもやはり速い打球を早く打ちたいというイメージを持っているようで、そのイメージがAと共存できる実技能力を身につけることを妨げるように影響しているようである。つまり、習い始めから学習者がグラウンドストロークで「速い打球を早く打たなければ」というイメージを持つことに、隔たりが生まれる大きな要因があると考えられる。それではなぜそんなイメージを学習者が持つのかと言えば、大学でのテニスの授業だけでそれが生まれる訳がないことは明らかで、それまでのスポーツ教育のあり方に関わるだろう。それを次章で考察する。

3 隔たりが意味すること

学習者が習い始めからグラウンドストロークで「速い打球を早く打たなければ」というイメージを持つことに、隔たりの要因があった。特にAがこのイメージを持つことは、レディネス不足などの自分の能力状態をも顧みないように、「自分が自分を感じ取れなくなる」ことを意味しているようである。このイメージを強く持てば持つほど、打球の速さを求めることを控え

ないと打球をコントロール出来るコツを自分も、相手のAも掴めないことを、また少しでも自分が打球をコントロールしようと努力しないと、相手(B, C)が共存しようと思っても共存できないことを、Aは感じ取れないようである。そこには、今自分がどのように動いてボールを打ったかなどを自己観察できないことも関係してくるだろう。しかし結局のところ、Aは自分の能力状態に適したグラウンドストロークの習得段階の順序性を踏む必要があることを認識、実感していないし、もっと言えば、自分の今の能力以上のことを求めていることにも気づいていないと言えるだろう。だから、「相手のAが打てそうな打球」が打てることを過小評価する傾向もあり、その打球を打てるのが速い、長い打球が打てるようになることに繋がるとは考えられないというAも中にはいる。筆者の指導経験から、Aが速い打球を早く打ちたければ、「相手のAが打てそうな打球」が打てるようになる方がかえって早道と考える。筆者はAに対して次のようなことをよく話す。「あなたは、今でもラケットを速く振る力は持っていますよ。しかし、今は3~4才の子どもにボールを受けさせるような積もりでグラウンドストロークを練習した方が、打球をコントロール出来るコツを掴めますよ。それから速い打球を打つのはだめですか」と。もちろん、そのコツが掴めても、相手からの速い打球を速い打球で返すようになるには時間がかかることも説明している。

隔たりがあることはグラウンドストロークが「出来る」ことの学習者の認識、実感を狭くして、その習得段階の順序性を逆転する傾向を、それを習得する時の二人の関係を共存よりも競争に向ける傾向を生み、授業の場にAがグラウンドストロークがうまく出来るようにはなれない構図を作り上げていると筆者には思える。これは認識だけの問題ではなく、身体でも実感しなければならぬ問題であり、またAだけの問題ではなく、B, Cにも関係する問題であり、更にはそれまでのスポーツ教育のあり方とも関わる問題であろう。

V グラウンドストローク習得段階の順序性を逆転する傾向が生まれる背景

1 それまでのスポーツ教育の影響

a 技の指導において「人間優先型の指導」が少ない傾向

Aがレディネス不足であるのに、ラリーが続かないのに、なぜ速い打球を早く打とうとするのかという問題は、前述したようにAが自分の能力状態に適したグラウンドストロークの習得段階の順序性があ

ることを認識、実感できにくいのはどうしてかという問題であろう。その習慣段階の順序性を逆転する傾向のあるAは、グラウンドストロークが出来るようになれない努力をしているように筆者には見える。だからグラウンドストロークの習得も、ゲームの習得も、それらの発展も望めないようである。筆者はバドミントンの授業も担当しているが、バドミントンが出来そうにない者にもこの傾向がある。例えばゲームになると、欠点を修正したり、コツを身につけようと練習してきた技の仕方とは程遠い仕方(一般的には力を入れ過ぎる仕方)でゲームをし、シャトルコックをコントロール出来なくて偶然にポイントを取って喜ぶ者も多いと感じている。これらのことには、それまでのスポーツ教育(ここでは球技、特にネットを挟んでする球技を考え、以下に球技教育と記す)で、特にその球技が出来そうにない者には、技が出来るようになっていく段階を踏んでその者なりに出来る技の仕方を、またその者なりに出来るゲームの仕方を指導していない傾向があるからと思われる。その傾向の要因を以下に考察する。

どの学校段階のどの授業でも、その球技種目のゲームに使われる技を一通り指導して、後半の授業ではゲームをするだろう。大学以外は普通、1単元が短期間であろう。また、どの学校段階でも1クラスの学習者数は多いだろう。短期間で多人数に技を指導してゲームをすることから、その球技が出来そうにない者の能力状態に適する技の仕方、ゲームの仕方の指導、つまり彼らが関与する場面に適する課題を与える指導、いわば「人間優先型の指導」は必然的に少なく、どちらかと言えば、決まりきった課題(図式技術³⁾)に学習者みんなをばめ込むような、いわば「課題優先型の指導」傾向が強かったと見る。極論すれば、それまでのスポーツ教育において彼らに適する段階を踏んでの指導が少ないことが慣習となるようである。スキー、器械運動などの技は怪我などの危険性があるから別として、その危険性の少ない球技教育では一般的に後者の指導傾向が強いと見る。そこには、教員養成大学では一般的にスポーツが出来る学習者、出来そうな学習者が多いから、特に球技では人間優先型の指導方法を教えることが少なかった傾向も影響していると思われる。それはともかく、どの単元においても、その球技が出来そうにない者は個々の技をほとんどコントロール出来ないまま、ゲームをしていたようである。

b 「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージ

ゲームになると技がうまく出来ない者は、多人数

です。球技のゲームならチームに迷惑をかけないようにとボールに触れないようにする者もいると、また出来る者の中には彼らにボールを送らない者もいると見聞きする。少人数でする球技のゲームの場合は、枝がうまく出来ない者でもボールに触らないわけにはいかず、そしてゲームだから勝とうとして技の仕方において力を入れ過ぎたり、一気に入れたりして、その技の達成度（ゲームの勝ち負けに直結しやすい打球の速さなど量的なこと）を増そうとする傾向が強いようである。それまでの球技教育では、技においても、ゲームにおいても、特にその球技が出来そうにない者に「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージを抱かせる指導傾向が強くなるようである。技をする時に力を入れ過ぎることなどが彼らの「癖の動き」となるようである。グラウンドストロークの指導の時に学習者みんなが「相手のAが打てそうな打球」を打てるように指導しないと、AとB、Cの共存が少なくと述べたように、個々の技の指導において人間優先型の指導がないと、技が出来る者と出来ない者との技習得時の共存は少なくなり、当然ゲームの動き習得時の共存も少ないままゲームをする傾向（技習得とゲーム習得との繋がりがほとんどない）が強くなると考える。すると特に球技が出来そうにない者は「過程のよさがなくてもゲームに勝てばいい」というスポーツ観を持つようになると考えられる。さらにゲームに勝つことだけをよしとするような成績評価をする傾向があると大学生から聞く。彼らが新しい技を学ぶ時に、「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージや先のスポーツ観や癖の動きが、彼らの能力状態に適する技の仕方のコツを掴めなくなるように影響すると考えられる。彼らが大学生になって自分なりに技が出来る段階があり、それを身につけると技やゲームの発展も望めることを説明され、指導されたとしても、「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージや先のスポーツ観からすぐには抜けきれないほど、それらが彼らに「染み込んでいる」と筆者は感じている。

以上が、球技が出来そうにない者が大学生になってテニスを習う時に、習い始めからでもグラウンドストロークで「速い打球を早く打たなければ」というイメージを持つように、つまりその習得段階の順序性を逆転する傾向が生まれるように、それまでの球技教育が影響していく過程であると考えられる。特に彼らに対して、その者なりに段階を追って練習していけば技や、ゲームが出来ることを、またそれらの発展が望めることを実感させるように、球技(スポーツ)

教育全体において「指導の一貫性⁶⁾」がなかったと考えられる。彼らに授業なんだから(部活動でする球技ではないのだからという意味)、球技は手っ取り早く手軽に楽しめればいい、楽しめるというイメージを植えつけてきたように思われる。もちろん、授業外では「過程のよさ」がないゲームの仕方でも楽しめるのなら楽しんでいいだろう。しかし、筆者としては折角10数年間も授業をしているのだからという気持ちである。

2 人間の視覚重視、観念重視の特質と技の仕方の「形」と「感じ」との関わり

人間には聴覚や触角などよりも視覚を重視する特質があるだろう。また「観念(歴史や慣習を踏まえて、あることに関して多くの人間が共有している考え方)を重視⁹⁾する特質があるだろう。この人間の特質と技の仕方の「形」と「感じ」の性質との関わりから、先に考察したそれまでの球技教育において「人間優先型の指導」が少なく、「課題優先型の指導」が多い傾向になることを、また特に球技が出来そうにない者が技を習う時に「自分が感じたこと」を大事に出来ない傾向があることを考察していく。そして、それまでの球技教育の影響ばかりではなく、彼らが「自分が感じたこと」を大事に出来ない傾向があることにも、彼らにとってグラウンドストロークで「速い打球を早く打たなければ」というイメージがしっかりしたものになっていく背景があることを考察していく。

a 球技が出来そうにない者は「自分が感じたこと」を大事に出来ない傾向がある

技の仕方を伝えるには、技の仕方の「形」と「感じ」を伝える必要がある。前者は言葉でも説明しやすいし、示範をすると学習者によく見える内容である。例えばグラウンドストロークのスイングの軌跡、スイング中のインパクトポイントなど、外から見られることである。だから「形」といっても物のように固定されたものではなく、運動経過を含む形である。複雑な動きや、速い動きの技では、その「形」も見えにくい者もいるだろう。その時はゆっくりした動きやポイントを強調する動きで示範する必要があるだろう。後者は言葉でも説明しにくいし、示範をしても、特にその技が出来そうにない者(例えば力の入れ方などに癖の動きのある者)には伝わりにくい内容である。技をする時の力の入れ方のタイミングや入れ加減、始動のタイミングなどで、運動経過を外からただ見るだけで分かる内容ではなく、それを観て、いわば内から感じ取る内容である。もちろん、「形」と「感じ」が一体化されて技が表現されるのである。

球技における技の仕方の「形」と「感じ」を伝える時のことを、グラウンドストロークを例に考えてみる。グラウンドストロークを習う時に、すでに学習者はテニスの試合をテレビなどで見ていることから、おそらくその一般的な仕方であるラケットを振り抜いてボールを打つという運動経過を含むスイングの「形」(図式技術)のイメージを持っているだろう。ラケットを振り抜くイメージを持っているのだから、スイングのスピードや力の入れ方などの「感じ」にも、図式技術に連動する「感じ」のイメージがその者にあるだろう。グラウンドストロークの図式技術のイメージを持つことは、それが出来そうにない者にとってはある程度の打球の速さも、図式技術のイメージでの仕方のコツも同時に求める習い方のようである。彼らのレディネス不足の状態などから、1週間1回の授業で習い始めからこの習い方(筆者の考える指導をしても、その学習者が図式技術のイメージを持っていること)では、彼らがそのコツを掴むことは到底無理なことで、打球の速さだけを求める結果になるようである。この習い方は「グラウンドストロークの指導は素振りから」と言われていたやり方であろう。まだ町中のレッスン場などで指導者が緩い打球の球出しをするが、習っている初心者がラケットを振り抜いて打球をコントロール出来ないまま、結構速い打球を打つ一本打ちをしている光景を見かける。その初心者が出来そうな人で、1週間に何回か練習し、それを何週間か続けるのならそれでもいいのかも知れない。しかし、それでもこの初心者はこの後、誰とどんなラリーをするのだろうかと筆者は心配である。

出来そうにない者はグラウンドストロークの図式技術のイメージを持つことで、グラウンドストロークは「こうするもの」というイメージを、つまりグラウンドストロークで速い打球を打たなければというイメージを持つようである。そこに先に考察した、それまでの球技教育のあり方の影響による「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージや「過程のよさがなくてもゲームに勝てばいい」というスポーツ観などを彼らが持っていることが重なり、グラウンドストロークで「速い打球を早く打たなければ」というイメージがしっかりしたものになるようである。そしてそのイメージが一種の観念になって、その内容が彼らにとって「変だな、おかしいな」とは感じ取れなくなっているようである。彼らはグラウンドストロークを実践して、その仕方の特に「感じ」に関する「自分が感じたこと」を、さまざまな思いが含まれている「速い打球を早

く打たなければ」という観念に縛られ、大事に出来なくなっている現象があると見る。この現象がある限り、彼らはグラウンドストローク習得において、ラケットの振り出しのタイミングを合わすこと、力の入れ方をうまくすることなどの重要性をなかなか実感できないようである。他の技の学習においても、例えばバドミントンのロングサービスやバレーボールのアンダーサービスなどを習う時、出来そうにない者は始動を一気にして、スイングの軌跡が一般的なそれから違い過ぎたり、ラケットや手にボールがきれいに当たらなかったりすることに、同じような現象が起こっていると見ている。

b 技の仕方の「感じ」を伝えることの難しさ

技の仕方の「感じ」は「形」に比べると初めから伝えにくい、伝わりにくい(感じ取りにくい)性質がある。ある技の仕方の「形」と「感じ」を出来そうにない者に伝える時、その者の能力状態に適するその技の仕方の「形」は変形する必要があっても、図式技術からそれほど大きく変形することはないだろう。しかし、技の仕方の「感じ」は、技によっては、また習う者の状態によっては、その技がある程度出来る者の「感じ」と比べても、かなり違うものになるだろう。例えばグラウンドストロークで緩い、短い打球を打つ「感じ」のようである。つまり、「形」を伝えるにもそうであるが、特に「感じ」を伝えるには教師の主観で伝え、その学習者の主観で感じ取ることが重要になってくるということである。例えば、その学習者がよい打点でボールを打てたかどうかを教師の主観で判断して、打点が遅過ぎるなどと指示を出し、またその指示を学習者は自分の主観で判断して修正しようとするのである。このよい打点、つまり「形」の場合には、客観的な基準があるから指示を出し易いだろう。しかし、緩い、短い打球を打つには、ラケットの振り出しのタイミングをもっと早めにとか、インパクトでもっと力をゆっくり入れるようにと「感じ」に関する指示を出すには、よい打点ほどはっきりした基準はないから、また出来そうにない者の状態は様々だから、特に教師の主観(教師自身のグラウンドストロークをしてきた経験、出来そうにない者を指導してきた経験などによる主観)に重要な役目があり、難しさがある。極論すれば、先に挙げた「人間優先型の指導」とは、技の仕方の幅広い内容がある「感じ」も、「その」出来そうにない者に適するように伝える努力をする指導も含まれると考える。それまでの球技教育の短期間で多人数に技を指導してゲームをする傾向がある上に、人間の視覚重視の特質と技の

仕方の「形」の見えやすい、示しやすい性質が結びつくと、図式技術に学習者みんなをはめ込むような「課題優先型の指導」傾向になってしまい、その出来そうにない者に適する技の仕方の「感じ」を伝える指導は少ないだろう。さらに技やゲームの仕方に関するさまざまな観念に、球技が出来そうにない者は縛られる傾向が強くなり、特に技の仕方の「感じ」に関して「自分が感じたこと」を大事に出来ない傾向がある。これでは彼らに適するその技の仕方の「感じ」を伝えることはさらに難しいだろう。

VI おわりに

大学一般体育の授業で、グラウンドストロークが出来ない者がいるのは、どうしてかを考察してきた。その大きな要因は、それまでの球技教育で技を、ゲームを習う時に、今までのスポーツ教育や学校体育の歴史を踏まえて作られてきた技、ゲーム、スポーツ、それらの指導方法などに関する観念や慣習を重視するあまり、特に球技が出来そうにない者が技やゲームを実践した時に「感じたこと」を、その本人も含め、みんなが大事にしなかった、出来なかった傾向、つまり「指導の一貫性」が少なかった傾向にあると考えられる。例えば「早くみんなと同じようにならなければ」という観念に、球技が出来そうにない者が縛られ、ゲームで力任せでも、偶然にでもポイントを取ることを（それも気持ちいいことなのかも知れない）を急ぎすぎて、ゆっくり時間をかけて「身体も気持ちいい」と感じられる技の仕方を身につけさせよう、つけようとする指導、学習が球技教育において少なかったということである。いわばマニュアル化された指導方法では、技が出来ない者がその方法で指導されてきて、彼らがそのマニュアルを当たり前と思っていることのようにある。そこには、本質的には運動研究と運動（技、ゲームなど）の指導実践との関わりはどうあるべきか、またその運動研究のあり方はどうあるべきかという問題が関与してくると考える。今後の課題とする。

なお、筆者が平成8年度に教養部から教育学部に転属してきたこともあり、将来、体育教師、小学校の教師になる学生のこと意識して本論をまとめたことをつけ加えておく。

VII まとめ

1) クラスの中には、よい打点を予測できない、スピード感覚が少ないなどのグラウンドストロークに対して「レディネス不足」の状態があったり、スイングを

する時に力を入れ過ぎてしまうなどの「癖の動き」を持っている、いわゆる出来そうにない者が少数だが大抵いる。彼らにもその者なりにグラウンドストロークで打球を安定してコントロール出来ることを望んだ。そのためには、クラスみんなが彼らが打てそうな緩い、短い打球をコースも安定して打てるコツを身につけて、それを習得する時に彼らと「共存」出来る必要があると考えた。つまり、打球の速さの求め具合は場面に依じての程度問題であることを認め、打球をコントロール出来るコツを身につけてから打球の速さを求めるというグラウンドストロークの「習得段階の順序性」を踏むことを学習者に望んだ。

2) 出来そうにない者はグラウンドストロークの習い始めから、速い打球を打つ傾向が強く、また出来そうな者、出来ている者も打球を安定してコントロール出来ること（相手の出来そうにない者が打てそうな打球をコントロール出来ることも含む）よりも、先に速い打球を求める傾向が強いようである。だから筆者の望むグラウンドストロークの「習得段階の順序性」を逆転する傾向があり、それを習得する時に、出来そうにない者同志はもちろん、彼らと他の者との「共存」が少なかった傾向がある。ここに筆者と学習者の間に隔たりがあり、特に出来そうにない者はレディネス不足の充足も、欠点の修正も、癖の動きの修正も出来ないで、打球をコントロール出来るコツを身につけられない「悪循環」を起こしていたと考える。

3) 特に、出来そうにない者はレディネス不足であるのに、ラリーが続かないのに習い始めからグラウンドストロークで「速い打球を早く打たなければ」というイメージを持っているようである。そこには、短時間に多人数に技を指導してゲームをさせる傾向がある、それまでの球技教育が影響していると考えられる。この傾向では、球技が出来そうにない者の能力状態に適する段階を追っての技の仕方、ゲームの仕方の指導は必然的に少なく、彼らは個々の技がコントロール出来ないままゲームをするようで、「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージを抱くようである。ゲームをすると、どうしても勝とうとして技の達成度を力をたくさん使うことなどで示そうとして、技をする時に力を使い過ぎるなどの「癖の動き」を、また「過程のよさがなくてもゲームに勝てばいい」というスポーツ観を、彼らは持つようである。つまり、それまでの球技教育で、特に彼らがゲームで力任せでも、偶然にでもポイントを取ることを（それも気持ちいいことなのかも知

れない)を急ぎすぎて、ゆっくり時間をかけて「身体も気持ちいい」と感じられる技の仕方を身につけよう、つけさせようとする「指導の一貫性」が少なかつたことが、彼らが大学生になってグラウンドストロークを習う時に「速い打球を早く打たなければ」というイメージを持つことに影響していると考ええる。

- 4) 技の仕方を伝えるには、その仕方の「形」と「感じ」を伝える必要がある。前者は示範をすると外から見られる、例えばスイングの軌跡とか、スイング中のインパクトポイントなどで、運動経過を含む形である。後者は技をする時の力の入れ方、始動のタイミングなどで、示範を観ていけば内から感じ取る内容である。3)で述べた球技が出来そうにない者へのそれまでの球技教育の影響には、特に技の仕方の「感じ」を彼らに適するように伝えることの難しさも大いに関わると考える。彼らに適する「感じ」を伝えるには、その基準が「形」ほどはっきりしていないことや、彼らの状態は様々であることから、それを伝える時に特に教師のその技の運動経験、指導経験を基にした主観に重要な役目があり、それを伝えることの難しさがある。短期間に多人数に技を指導する環境もあり、その役目を果たすことは、なお難しいようである。彼らには3)で述べたように「早くみんなと同じようにならなければ」というイメージなどがあり、人間の観念重視の特質から、それらのイメージが一種の観念となるようである。彼らがある技を習う時に、それらの観念に縛られ、特にその技の仕方の「感じ」に関する「自分が感じたこと」を大事にできなくなる傾向があり、彼らに適する「感じ」を伝えることの難しさが更に加わるようである。彼らがグラウンドストロークを習う時にも、まさに彼らに適するグラウンドストロークの仕方の「感じ」を伝えることの難しさがあると考ええる。

注・引用文献

- 1) このことに関しては、本分中V章、2節、bを参

照されたし。

- 2) グラウンドストロークの指導の詳細は以下を参照されたし。拙論『硬式テニスにおけるグラウンドストロークの指導法に関する試論—「慣習的な指導」では「出来ない者」を対象にして—』スポーツ運動学研究6(日本スポーツ運動学会)1993年, pp.73-85。
- 3) 『け上りという技は、クンツによってはじめて行われましたが、(中略)〈私のこつ〉をもったクンツの技は、だんだんと練習仲間に伝わり、公共性をもった〈図式技術〉となり、現代まで伝承されてきたのだと考えられます。(中略)〈図式技術〉に〈私のこつ〉という自分の血を通わせて私のけ上りとなるのです。』と、私のこつと図式技術が説明されている。つまり、図式技術とは公共性があるが、技の仕方のこつが抽象化されているということである。金子明友監修 吉田茂他編『教師のための運動学』大修館書店 1996年, p.24。
- 4) 拙論「スポーツ教育の一貫性について考える」体育科教育学研究, 第9号, pp.33-44。
- 5) 養老は、『「脳死および臓器移植に関する臨時調査会」を通過したと思われる公文書に「死と宣告された瞬間に人間は物」だと述べられていることを引いて、解剖学者である私は、一般論としても、個人としても「死体をモノ扱いしている」と、また「感性が慣れなければ」解剖という行為も出来ないと思われていること(観念)を嘆いている。そして人間が戦争で人を殺すのも「感性の慣れ」と言われるが、そうではなく観念が人々を残酷にすることを、「ユダヤ人は劣等人種である」というヒットラーの観念が多くの人々に共有された観念になり、強制収容所を生んだ』と説明しており、人間には観念が重要な意味を持っていることを示唆している。『』内は筆者の文責で要約した。また、本文中の()内も筆者の文責である。養老孟司『日本人の身体観の歴史』法蔵館 1996年, pp.11-19。